

倭国の大乱と邪馬台国及び狗奴国の誕生

川上 郁夫（会員番号 10338）

紹介文

邪馬台国については多くの方が文献及び遺跡の調査研究を行い、成果を出しているところです。その成果にわずかの想像を加えて、古代史の流れをすっきりと整理してみました。

本文

要旨

倭国の乱（三国志）又は大乱（後漢書）とは、記紀にいう「葦原中つ国平定」及び「神武東征」に象徴される出来事である。

この結果北部九州から出雲、吉備、畿内大和に至る「西日本国」が誕生した。

しかし、まもなく都の位置を巡って争いが発生し、「西日本国」は東西に分裂した。西側が邪馬台国、東側が狗奴国である。

両国間では吉備争奪戦が繰り広げられ、4世紀前半に吉備は完全に狗奴国の勢力範囲となった。

詳細

I 倭国の大乱前の西日本の出来事

1 前1世紀末頃まで

漢書地理志にいう「分かれて百余国となる」頃の西日本の状況を述べます。各地遺跡の調査研究により、以下のことは明らかです。

- (1) 水田耕作が西日本各地に伝わる
- (2) 青銅器、鉄器が西日本各地に伝わる
- (3) 銅鐸祭祀が始まる

主に出雲及び出雲以東の日本海側、吉備、近畿、四国東部、東海

- (4) 銅剣・銅鏡祭祀が始まる

主に北部九州、西中国、四国西部

2 1世紀頃の有力地域の動き

- (1) 有力な諸地域及び相互関係

北部九州、出雲、吉備、畿内大和に弥生時代中・後期の大きな遺跡があり、これら4地域が当時の有力地域と考えられます。

このうち北部九州と出雲が友好関係、吉備と畿内大和が友好関係にあり、

北部九州と吉備、畿内大和は敵対的であったと考えられます。

その理由は、瀬戸内海に高地性集落が多数見られ、出雲地方にはほとんどないことです。

(2) 中国王朝、朝鮮半島との交流の活発化

後漢書に以下の記録があります。

57年 奴国が後漢へ遣使、金印を授与される

108年 倭国王帥升等が後漢へ遣使

奴国は金印の発見場所から考えて、北部九州にあった国でしょう。

倭国王帥升等の国はどのあたりでしょうか？以下に述べます。

また、鉄製品が北部九州で他の地域に比べて多数発見されていることは、安本美典先生の指摘のとおりです。鉄の交易を北部九州が独占していたのでしよう。

II 倭国大いに乱れる

1 大乱のきっかけは何？

大陸への遣使を巡る地域間の主導権争い、鉄資源の入手等の交易を巡る地域間対立が激化したことが原因であると考えます。

57年に奴国が後漢へ遣使し金印を授与される出来事は、奴国が倭国の代表であることを後漢王朝に認めてもらったということであり、出雲等の諸地域の反発を買ったものと考えられます。

大陸への遣使、交易に先鞭をつけ、独占状態の北部九州がこれを強化するために金印をもらって権威付けを行ったことに、出雲が反発して同盟関係は解消されました。

北部九州に対抗するため、出雲は後漢への遣使を企て、吉備及び畿内大和が出雲を支援し、160人もの生口を献じる使節を後漢へ派遣したのではないのでしょうか。倭国王帥升等の「等」は、吉備及び畿内大和を指すものと考えます。

吉備及び畿内大和から後漢に使者を派遣しようとしても、関門海峡で北部九州勢に邪魔されてしまいますが、出雲なら、関門海峡に関係なく、朝鮮半島へ船を出せるでしょう。

出雲の王スサノオが実在の人物であれば、倭国王スイショウすなわちスサノオという可能性もあります。発音が似ています。スサノオは神話に登場する神ですが、アマテラスやツクヨミと比べて、名前があまり神様っぽくない印象があります。

2 大乱の発生と西日本国の誕生

1で述べた北部九州と出雲間の対立による武力衝突が大乱の1つです。

2世紀中頃、北部九州勢による出雲攻略があったものと思われます。根拠は以下のとおりです。

- (1) 記紀 高天原勢力による「葦原中つ国平定」
- (2) 出雲における銅鐸の埋納
- (3) 青谷上寺地遺跡の多数の受傷人骨

出雲攻略に成功した北部九州が、吉備及び畿内大和を制圧したことが、大乱の2つめです。

2世紀後半、北部九州勢による吉備、畿内大和遠征があったものと思われます。根拠は以下のとおりです。

- (1) 記紀「神武東征」
- (2) 瀬戸内海高地性集落の消滅
- (3) 畿内大和周辺地域の銅鐸の埋納

出雲敗れるの衝撃は大きかったと思われ、吉備をはじめとする瀬戸内海勢力は、記紀によれば東征に対して抵抗した記録がありません。

畿内大和は東征に対して激しく抵抗しますが、最終的には東征勢力に従ったことは記紀の記述からうかがうことができます。

180年頃に東征は終了し、北部九州から山陰、瀬戸内海、大阪、奈良までを統一した西日本国が誕生したものと思われます。

Ⅲ 邪馬台国及び狗奴国の誕生

1 西日本国の統治機構と遷都

北部九州から畿内大和までの広大なエリアを統治するためには、どのような統治機構を整備し、どこに都を置くべきでしょうか？

答えは魏志倭人伝にあるとおり、統治機構として各国に正副の役人を配置して統制し、伊都国に一大率を配置して外交や交易を掌握させました。後世の太宰府と同じです。

都はどこでしょうか？私なら吉備に置きたいところです。すでに栄えている地域であり、北部九州と畿内大和の中間に位置し、港があり（上東遺跡）、四国への交通も便利、山ひとつ超えれば出雲にも通じる、まさに交通の要衝です。

西日本国も吉備へ遷都したことでしょう。この結果、各地の土器が吉備へ集まってきました。（岡山県古代吉備文化財センターHP「意外に多い土器の移動」）しかし、この遷都をめぐって、路線対立が発生しました。

2 西日本国の分裂

吉備遷都に反発したのは、東征勢力の後継者です。彼らは大和遷都を主張しました。

記紀によれば、神武天皇は東征出発以前から畿内大和への遷都を構想していたとあります。実際は東征終了後かもしれません。

東海、北陸方面へも勢力を拡大しようと思えば、当然の主張と思います。

この結果、200年頃、路線対立により西日本国は分裂し、西部は卑弥呼を擁立して邪馬台国が成立し、東部は狗奴国（のちの大和王権）が成立しました。

安本美典先生の指摘では、畿内大和と筑後朝倉における地名が著しく類似するとのこと。東征勢力の後継者は、分裂して別の国となった旧都を懐かしむとともに、自分たちこそ北部九州の正当な後継者であるとの気持ちから、筑後朝倉の地名を畿内大和に付けたのかもしれません。

邪馬台国のおおまかな範囲は北部九州から吉備、兵庫県西部まで、狗奴国のおおまかな範囲は兵庫県東部から河内、畿内大和までと思われ。また、出雲は半独立状態となって日本海沿いに北陸まで四隅突出墓地域を形成しました。

前方後方墳地域を形成する東海は狗奴国と友好関係にあったと思われ。纏向遺跡の外来土器に東海地方の占める割合が大きいことが挙げられます。

そして、各地で古墳時代が始まりました。首長墓の祭祀を通じて、広範囲でのより強い結束が必要となったからでしょう。

卑弥呼は幼少のころからの祭祀の能力を評価されて共立され、長年にわたり祭祀で大量の桃を使用したと考えられます。（上東遺跡）

IV 吉備争奪戦

1 第一次争奪戦

魏志倭人伝には、卑弥呼と狗奴国の男王とは素より不和とあります。

狗奴国の男王は、国を割った張本人ですから、憎むべき相手なのでしょう。

その狗奴国は都を大和に置き、魏略逸文にあるとおり河内に役人（拘右智卑狗＝こうちひこ）を置き、兵庫県西部に勢力を伸ばそうとしたと思われ。

この状況を見て卑弥呼は後ろ盾の必要を感じ、238年か239年に魏へ遣使しました。

そして245年頃に邪馬台国と狗奴国が武力衝突し、魏が邪馬台国を支援したことは魏志倭人伝のとおりです。

このことは、古事記における孝霊天皇時の吉備攻略の記述に相当すると思われ。古事記によれば、針間の氷河で神を祭り、針間を道の口として吉備を攻略しようとした。氷河（ひかわ）とは、氷丘（ひおか）を流れる川でしょうから、加古川を指すと思います。JR加古川線の加古川の次の駅が日岡（ひおか）です。日岡は播磨国風土記に出てくる古くからある地名です。

邪馬台国に魏が支援する姿勢を示したため、邪馬台国と狗奴国は停戦し、こ

の後しばらく武力衝突はなくなりました。卑弥呼外交の成果です。

247年頃に卑弥呼は亡くなり、邪馬台国では後継者争いが発生、13歳の台与を擁立し争い収まり、266年に邪馬台国（台与）が晋に遣使しています。

台与もまた、幼少のころから祭祀の能力があったのでしょうか。

邪馬台国が中国王朝に遣使している間は、狗奴国は吉備を攻略できませんでした。

2 第二次争奪戦

第一次吉備争奪戦から70年後、事態が動きました。

313年頃、高句麗が楽浪郡を攻略し、邪馬台国への魏の支援がなくなったので、狗奴国（以降大和王権と表記します）は日本書紀にあるとおり、四道將軍の派遣を開始しました。

想像するに、まず一人を丹波に派遣して鉄資源を確保しつつ出雲と北陸を切り離し、次に比較的大和王権と友好的な東海と北陸に二人を派遣して大和王権に従うことを確認し、東方を安全にして最後に吉備を攻略したのではないのでしょうか。

大和王権は吉備攻略に成功し、吉備文化が大和に流入することになりました。

V 終わりに

その後の邪馬台国はどうなったのでしょうか。

記紀によれば、景行天皇のとき、大和王権は熊襲と衝突しています。このことから考えると、四道將軍派遣後、記紀にいういわゆる出雲神宝事件で出雲の親九州派（出雲振根）が排除されたことをきっかけに西中国を失い、さらに南九州から熊襲に攻略されて滅亡したものと思われます。

終わり

自己紹介 川上 郁夫（かわかみ いくお）

1963年生まれ 神奈川県在住

小学生の頃、集英社のまんが日本の歴史で邪馬台国に興味を持ちました。

弥生時代から古墳時代に向け、ムラやクニは統合へ向かっていきますが、たまには分裂することもある、という発想で、発表してみました。